



ネガティブな平穏とポジティブな平穏

あけぼのぼんぽこ保育園 主任 三倉 敏浩

地震に遭遇

6月18日(月)7時58分。大阪府北部を震源とした最大震度6の地震が発生しました。私達が生活をしている地域も震度5強の揺れが襲い、まさに恐怖どん底へ落とされました。私は既に保育園へ出勤し、園庭で保護者の方と対応している時に地震が発生しました。すぐに保育園の子ども達の安全を確保し、職員へ指示を出し、保護者や職員へ連絡を入れてと、矢継ぎ早に行動しつつも頭の中では『家族は無事だろうか?』と不安でいっぱいになっていました。

実は私自身が大きな地震を経験するのは、今回が初めてではありません。今から23年前、当時10歳だった私は兵庫県南部の実家で、阪神淡路大震災を経験しました。あの時に感じた地震に対しての恐怖心は、その後もずっと自分の心の中に傷痕として残っていました。今回、大きな揺れを経験し、あの恐怖がフラッシュバックされましたが、それ以上に家族の無事を思う気持ちが、自分の心を冷静にし、落ち着いて行動する事に繋がったのではないかと感じています。その後少しして、妻から『家族は無事です!』という連絡が入っているのを確認し、心の底から安堵した事を今でも鮮明に覚えています。自然の力の壮大さと、それを目の前にした時の人間の無力さを痛感させられたできごとでした。

地震の翌日からも余震への不安や恐怖感が募る中、なるべく早く家族のもとへ帰ってあげたい気持ちと、地震の対応に追われなかなか帰れない状態との板挟みで、家族には本当に辛い思いをさせてしまったと思います。それでも家族4人全員並んで眠りにつき、余震がある度に体を寄せ合って“心を支え合う”状態は、まさに『家族』であるのだと、こういう時だからこそ強く感じさせられました。そんなこんなでまだまだ通常の生活へ戻るには時間が掛かるのかもしれませんが、1歩1歩“今まで通りの生活”へと戻ろうとしている毎日です。

“今まで通り”の生活って?

ここでふと考えた事があります。そもそも我が家の“通常の”生活ってどんなものだったのでしょうか?日中、大人は(仕事で)保育園へ、子どもも保育園へ。夕方に妻と子どもが帰宅して、なんやかんやしている内に、夜に私が帰ってきて、子ども達をお風呂に入れて夕食を食べて就寝。特に私が帰宅するまで妻はひとりで2人の子どもの身の回りの事や家事を慌ただしくこなし、“カラフルな毎日”とは言い難い生活ですが、それでもこれが我が家の“平穏”なルーティンです。しかし、そんな平穏な毎日には“平穏”とは言えない瞬間が存在するのです…。



とにかく、次男の目が固い!

毎夜毎夜、次男がなかなか寝てくれません。次男の寝かしつけをする事が私の仰せつかった役目なのですが、1日の最後にして最大の任務は、毎夜私を悩ませます。こういった話をすると、「朝早めに起こしてリズムを整えたら」とか「身体をいっぱい動かして疲れさせれば」と、(職業柄)良い対応策のひとつでも浮かんできそうなのですが、残念な事に彼には通用しません。朝早く起きようが、昼間に公園内をグルグル走らせようが、夜遅めに布団に誘おうが、何故か寝かしつけに1時間近くかかります。本当に謎です。今まで何十人・何百人という子ども達を寝かしてきた“寝かしつけのプロ”である我々保育士夫婦をもってしても、完全にお手上げ状態なわけです。

あの手この手を試していたある日、「そんなになかなか寝ないなら、お化けくるわ!」と、つい口走った私のいっばいいいばいな姿を見た妻は「前は、そうやって脅してみたいなことを子どもに言ってはいけないうって、あなたが言ったのではなかったの?」と笑いました。私は全然笑えません、至って真剣でしたから。それくらい、『子育て』と言うのは『保育』とはまた違った大変さがあり、頭でわかっていてもなかなか出来ない…本当に子育てというものは難しいものだと考えさせられている毎日です。

ポジティブな“平穏”

今回、我が家は『地震』というある意味では『非常』を経験しました。冒頭でも書いたように、こういった時が『平穏な毎日』の大切さを再認識する事が出来る唯一の機会なのかもしれません。という事は、『次男の寝つきの悪さ』という、一見ネガティブに見える平穏な毎日の1場面すら、実はものすごく幸福でポジティブな時間なのかもしれません。

家族がこうして『“平穏”で“慌ただしい”毎日を過ごしている事』が、本当は何ものにもかえがたい尊い時間だと、日々かみしめていきたいものです。